



貨幣の世界

2

今回は古代オリエントから近代の欧州を中心に貨幣の形をご紹介します。今回は前後編に分けて、中国を中心とする東アジアの貨幣の形を、歴史を追いながらみていきたいと思います。

形

その2

古代から近世の東アジア

前編

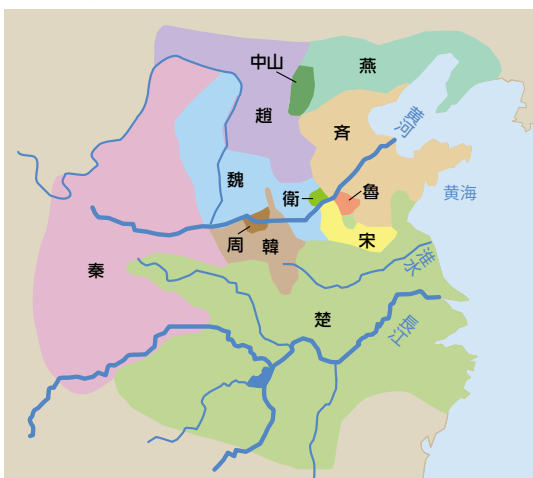
バラエティーに富む 古代中国の貨幣

「貨」「財」「購」「買」「賃」「賃」と経済活動にかかわる漢字には「貝」が使われているものが多く見られます。古代中国の商（殷、紀元前一六世紀頃～紀元前一世紀頃）や周（紀元前一〇五〇頃～紀元前二五六年）では、子安貝（タカラガイ科の巻貝の俗称）が貨幣の役割を果たしていたのではないかとされています（写真1）。その後、周の王室の権威が落ちていく中、さまざまな国が「中原に鹿を逐う」春秋戦国期（紀元前八世紀～紀元前三世紀）となります。諸子百家の時代とも言

われますが、さまざまな国において、子安貝や生活必需品に範をとったとみられるいろいろな形の金属貨幣が造られ、多くの地域でそれらが子安貝にとってかわって使用されるようになりました。これらの金属貨幣も、もとは贈答に使われていたものが、交換の媒介物として使われ、貨幣に転化したのではないかとされています（写真2～6）。

中国の貨幣の登場時期は、古代オリエントの貨幣の登場時期と同じ頃です。その製造方法は、古代オリエントでは金属への「打刻」が採用されたのに対して、古代中国の青銅貨幣は、鋳型に青銅を流してつくる「鑄造」でした（銅銭の鑄造

戦国時代の主要国（紀元前5世紀～紀元前3世紀頃）



春秋時代の主要国（紀元前8世紀～紀元前5世紀頃）

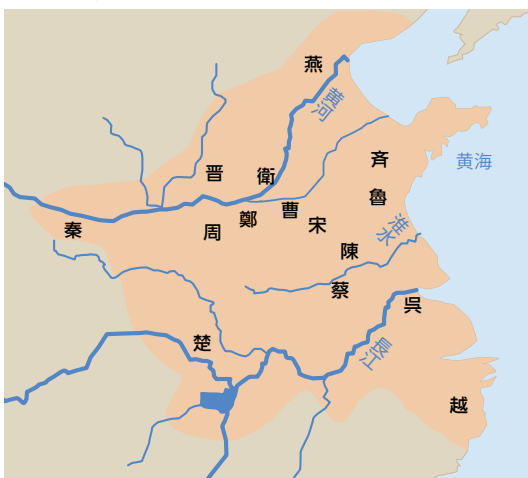


写真1 子安貝貨幣



タカラガイは日本でも千葉県館山市等暖かい地方の海で見ることが出来ます。

方法の詳細については、本誌二〇一五年春号の「お金の源 第一回銅貨」をご覧ください。

同時代の古代ギリシャ・オリエントの貨幣が現在の目からすると少々いびつで不揃いであるのに対して、古代中国の青銅貨幣は、商（殷）や周の青銅器製造技術の高さをほうふつとさせるように、形態がとても整っています。

（後編は次号でご紹介します）

春秋戦国時代の貨幣

写真3 刀貨（刀幣）



写真2 蟻鼻銭



見た目のとおり、蟻の頭部のような形です。

写真4 布貨（布幣）



写真5 円銭（秦・重一兩十二一珠）



写真6 楚の金貨 郢稱



楚は、現在の江南地域。もともとは小さな極印を多数連ねた板状の金貨で、写真のように極印ごとに切断するなどして秤量貨幣として使用されていたようです。ちなみに、楚を滅ぼした秦の公定レートで、金1斤（約320g）＝銅銭1万枚とされていたことからみて、この金貨は日常使いには高額過ぎたと思われる。

（写真1～6 提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

貨幣の始まり

中国の北方内陸部にあった商（殷）では、はるか数千キロも南の海で産出される子安貝が貴重品として扱われ、王と関係する王族や豪族等の間で贈答品として使われていたとされています。そうした贈答のサイクルの中から、交換の媒介物＝貨幣的役割が生じ、子安貝は貨幣に転じていったのではないかとされています（なお、子安貝はあくまで贈答品の枠を超えないという学説もあります）。

さて、西にヘロドトスあれば東に司馬遷あり。彼の『史記平準書』では貨幣の始まりをこう書いています。

「農工商交易之路通。而龜貝・金銭・刀布之幣興焉。所從來久遠。（解釈：農・工・商それぞれが相互に取引する道が通じて、龜貝〈龜の甲や貝殻〉、金銭〈黄金や穴あきの青銅貨〉、刀貨・布貨〈刀形や鋏形の青銅貨〉などの貨幣の使用が始まった。その起源はたいそう古い）」（注）

産業の発展が貨幣をもたらしたというのは、アリストテレスと同じですね。

（注）史記の原文・解釈は、『史記平準書・漢書食貨志』（加藤繁注釈、岩波書店）P.64、65 および『史記下漢武篇』（田中謙二、一海知義著、朝日新聞社）P.88～90 を参照しています。